

【名声・評判の空】

[伝道者の書 講解・第14回]

『伝道者の書(コヘレトの言葉)』

4章13～16節

熊谷 徹

2014年6月22日

茅ヶ崎同盟教会礼拝説教

【序】ここまでの『伝道者の書』概観；

(1)「悠々たるかな天壤、遼遼たるかな古今、五尺の小軀をもってこの大をはからむとす。(中略)。万有の真相はただ一言にて尽くす、曰く、不可解」。旧制一高の学生・藤村操は華巖の滝の木にこう書き残し、滝壺に身を投げた。彼の死は、夏目漱石に衝撃をもたらした。彼は夏目漱石の生徒だったのである。しかも、数日前に漱石は課題をやってこなかった藤村操を厳しく叱責していた。教え子の死は漱石の心に深い傷を残した。やがて彼は教師を辞めて小説家となったが、漱石の作品に漂う物悲しい寂寥感や、どこかにつきまとっている死の影は、教え子・藤村操の突然の死と無関係ではないと思う。

先週6月19日は桜桃忌だった。作家・太宰治の死を記念する日である。彼も藤村と同じように自殺した。その太宰治が生前こう書き残している；「僕は自分がなぜ生きていなければならないのか、それが全然わからないのです」。

同じく作家で、『狭き門』の作者アンドレ・ジイドはこう言った；「私は存在する。だが私は存在理由を見つけたいのだ。なぜ私が生きているのかを知りたいのだ」。

藤村操、太宰治、アンドレ・ジイド、そして夏目漱石…。これらの人達だけではない。昔も今も、心ある人達は、人生の意義を真剣に尋ね求めて苦悩してきた。彼らはこう自問して来たのである；「私は何のために生きているのか？私の存在価値は？」と。

(2)伝道者・コーヘレスもそうである。彼は『伝道者の書(コヘレトの言葉)』第6章12節でこう言う；「だれが知ろうか。影のように過ごすむなしいつかのまの人生で、何が人のために善であるかを。だれが人に告げることができようか。彼の後に、日の下で何が起こるかを」。伝道者はこの問いを自らに課して、人生の意義、最高善は何かを探ろうとして様々な事にトライした。知恵と知識を追い求めて学問に没頭し、科学・哲学・文学の世界に答えをみつけようと試みた。しかし悲しいかな、それらの中に人生の奥義を解き明かす答えを見つけることはできなかった。そこで彼は象牙の塔を飛び出して、この世のドロドロとした現実世界に生きる意義を見出そうと決意した。こうして彼の「ファウスト的遍歴」が始まるのである。

コーヘレスは「心の中で言った。「さあ、快樂を味わってみるがよい。楽しんでみるがよい」と(2:1)。そして彼は、事業を起こし、豪邸を建てた。金銀財宝を蓄え、何人もの妾を囲い、酒池肉林の快樂に溺れた。地位も名声も権力も手に入れた。それでも彼の心は満たされなかった。残るのは虚しさであった。彼はこうつぶやいた;「働く者は労苦して何の益を得よう」と(3:9)。そしてこう言った;「私はまた、あらゆる労苦とあらゆる仕事の成功を見た。それは人間同士のねたみにすぎない。これもまた、むなしく、風を追うようなものだ。」(4:4)。

このようにコーヘレスはこの世の様々なことを体験した。そしてこの世の虚しさを味わったのである。その彼が次に目指したのは政治の世界であった。それが今日の箇所、4章13節から16節の段落である。

【1】退を知らぬ老愚王(4:13);

この段落は主語と代名詞が何を指しているのか不明確である。そのため、非常に分かり難い。だが、言わんとしていることは分かる。それは、政權交代のめまぐるしさと不安定さ、そして世間の名声や評判の虚しさと儂さである。

伝道者・コーヘレスは、13節でこう言う;「貧しくても知恵のある若者は、もう忠言を受けつけない年とった愚かな王にまさる」。

ここでは、正反対のものが三組対比されている。「貧しい者」と「王」、「知恵ある者」と「愚かな者」、「若者」と「年とった者」の三組である。

古代中国の賢人・子思は名著『中庸』の中で、「天下の王たる者が重んずべきものが三つある(天下に王たるに三重(サンチョウ)あり)」と言っている。その三つのものは、「品格」と「人徳」と「時を見分ける判断力《位と徳と時》」である。

一方、わが伝道者は、王たる者が重んずべき三つのものは、「知恵、柔和な心、謙遜さ」であると言う。ところがここに登場する王には「知恵」も「柔和な心」も「謙遜さ」もなかった。

「年とった愚かな」とは「年をとったにもかかわらず愚かな」という意味である。古代ユダヤでは人は年を取るに連れて知恵深くなるものとされ、知恵ある老人は敬

愛された。所がこの王は「年をとったにも拘らず愚か」だった。彼のどこが「愚か」なのかというと、「もう忠言を受けつけない(直訳「もはや忠告されることを知らない」)」という点である。なぜ「忠告を受けつけない」のかと言えば、「知恵」もなく、「柔和な心」も持たず、「謙虚」でもないからである。自分の地位と権力を誇り、人を軽蔑するから「忠言・忠告を受けつけない」のである。彼は、目下の者、とりわけ「貧しくても知恵のある若者」の「忠言・忠告を受けつけない」。心と思考における老化・硬直化・愚鈍化である。孔子が言う「耳順」即ち「六十にして耳順う」という謙虚さとは全く逆を行く「年をとったにも拘らず愚かな」王なのである。

「時を知り、難を知り、命を知り、退を知り、足るを知る。この五つの知を備えれば如何なる難局も乗り越えることができる」と言ったのは五知先生と称された古代中国の賢者・李繹である。この五つの知、「五知」の中で良く知られているのが「足るを知る」ということ、「知足」である。「足るを知る」ということだけでも真に「知る」ことができたなら、私達の心はゆとりと平安に満ちたものとなるに違いない。ところが、コーヘレスがここに描く「王」は「足ることを知る」ということがなかった。そうして年老いた今、「退を知らない」愚かな王となった。そして、若い者の忠言、とりわけ王位継承への忠言には耳を傾けず、己れの権力と地位にしがみつき老醜を晒す。

「退を知る」と言っても、我々庶民が考えるような「退職」や「引退」のことではない。功なり名を遂げた王、富も名声も掌中に収めた王の「退」、即ち退位と王位継承のことである。古代中国の思想家・老子は、「富貴にしておごれば、みずからその咎を遺す。功遂げ身退くは天の道なり」と言った。世間にはこの老子の言葉と正反対の道を歩み、老醜を曝け出し、晩節を穢す人は少なくない。

朱子学の祖・朱子は、「退を好む者は、廉謹にして恥を知る」と言った。廉謹とは、潔く慎み深いという意味である。所がここに伝道者が描く「年老いた愚かな王」は、退を好まず、「廉謹」を失い、「恥」を曝け出して権力の座にしがみつく。「功遂げ身退くは天の道なり」と言った老子の言葉と正反対で、「退くこと」を知らない。そのような王が民衆から見放されるのは時間の問題であるのに、そのことに気づかな

いのである。

【2】政権交代劇の空(4:14~15)；

(1)次にコーヘレスは、王位継承問題について語る。14節；「たとい、彼が牢獄から出て来て王になったにしても、たとい、彼が王国で貧しく生まれた者であったにしても。」

14節から16節はかなり難解であり、様々な解釈が提唱されているが、私達は、14節に二度出て来る「彼」は13節の「貧しくても知恵ある若者」のことだと解しておこう。その線に沿って13節と14節を分かり易く言えばこうなる；「年老いた愚かな王が支配する王国に、貧しいが知恵のある若者がいた。その若者は何らかの理由で捕らえられて投獄された。時が流れ、牢獄から出て来た若者は、知恵を用いて頭角を現わし遂には王になった」。

(2)いつの時代も民衆はヒーロー・英雄を求める。民衆は貧しさや不遇な境遇に負けず、頂点まで登り詰めた知恵ある若者を自分たちの王として喜び迎えた。15節で伝道者はこう言う；「私は、日の下に生息するすべての生きものが、王に代わって立つ後継の若者の側につくのを見た」。

ここも、「王」とは誰のことで「後継の[直訳・第二の]若者」とは誰のことなのかハッキリしない。そのため、色々な解釈がなされているが、私達としては次のような意味に理解しておく；「年老いた愚かな王に代わって、貧しさから這い上がった知恵ある若者が後継の王となった。そして全民衆はその若い王を喜び迎えた」。

【3】名声と評判の空(4:16)；

(1)しかし、民衆の人気や世間の評判・支持ほど気まぐれなものはない。コーヘレスはこう言う；16節；「すべての民には果てしがたい。彼が今あるすべての民の先頭に立っても、これから後の者たちは、彼を喜ばないであろう。これもまた、むなしく、風を追うようなものだ」。

ここも、どう読むべきかも難しいのだが、先ほどの線に沿って読めば、次のような

意味となるであろう;「年老いた愚かな王に代わって知恵ある若者が後継の王となった。若者は民衆の先頭に立って民を治めた。しかしそれも長くは続かない。彼もやがて先代の王のように《忠言を受けつけない年とった愚かな王》となる。すると《これから後の者たち》即ち、後の世代の民衆が、その王を喜ばなくなる。《全ての民には果てしが無い》。まさに《歴史は繰り返す》である。《昔起こったことはこれからも起こる。日の下に新しきことなし》である(1:9)。これもまた、むなしく、風を追うようなものだ」。

《eg》昨年放映された大河ドラマ『八重の桜』には当時のキリスト教界の重要人物が大勢登場した。その中に伊勢時雄という人物がいる。幕末の思想家・横井小楠の息子である。彼は新島襄の同志社で学んだ後、牧師となり、八重の兄・山本覚馬の次女・みねと結婚した。その伊勢時雄(後の横井時雄)が、牧師生活20年目にして、それまでの自分の働きに疑念を抱いた。悩んだ末に、「日本を救うには伝道するだけではダメだ、政治を変えなければ何も変わらない」という結論に達した。そして牧師を辞めて政治家になった。

その横井時雄が死んだ時、追悼式で内村鑑三が弔辞を述べた。内村鑑三はこう言った;「君には他にアンビションがあったのであります。ホーリー・アンビションがあったのであります。君は日本国を救わんと欲したのであります。しかも、早く、君の一生のうちに、救わんと欲したのであります。そして、伝道に従事すること20年。功績の見るべきものありしといえども、しかも君の理想を離れること遙かに遠しでありまして、君はじれったくなったのであります。私が君より聞いた最も悲しき言葉はこれでありました。君は一日、私に告げて言われました。『君！伝道ではとてもだめだよ。ぼくは…。ぼくは伝道をやめて、政治を試みるよ』とのことであります。ああ、横井君。あの時を思うて、ぼくは今なお涙がこぼるる」。

熱血の伝道者・内村鑑三は、伝道者・横井が政治家・横井となるのを悲しみ惜しんだ。その内村鑑三の思いは、後日、政治家・横井の挫折となって現実のものとなった。内村鑑三はそのことをこう語った;「横井君が日本の政治界に入りしは、

多摩川の鮎が誤って東京市内のドブ泥に落ちたと同じであります。鮎は死なざるを得ません」。

(2)かつては横井の活躍を大々的に報道したある新聞は、横井の死をこう報じた；「横井氏は学者として失敗し、宗教家として失敗し、また政治家として失敗した。横井氏は何事にも貫徹せずしてその一生を終わった」と。一時はさんざん持ち上げた挙句、最後はドスンと突き落とす。人間の評価や人気など所詮はこの程度のものに過ぎない。

主イエスがロバの子に乗ってエルサレムにやって来た時、民衆は「**ダビデの子にホサナ**」と歓呼の叫びを上げて主イエスを迎えた。その僅か数日後、彼らは「**イエスを十字架につけろ**」と叫んだ(ルカ 23:21)。それがこの世の人間なのである。私達はそうした空の空なる世間の評価を頼りに生きるべきであろうか。そうではない。永遠不変の神の評価こそが大切なのである。

聖書はこう告げている；「**この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい**」(ローマ 12:2)。日の下における空なる人生を打破する鍵はここにある。即ち、「**神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知る**」ことである。神の御前にいかに生きるか、永遠なるお方の目に価値ある人生とは何なのか、ということを考えて生きるべきなのである。

【結】神をおそれよ；

私達は必要以上に他人の目を気にしてはいないだろうか。そんな私達に、聖書は、「人の目を気にするのではなく神の目を気にせよ」と教える。「人の評価・評判によって一喜一憂するのではなく、神の目に自分がどう見えているのかをこそ気にすべきである」と教えるのである。『箴言』はこう告げる；「**人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。**」(箴 29:25)。キリストも、「**人を恐れるな。ただ神を恐れよ**」(Lk12:4-5)と仰った。

「主に信頼し、主をおそれる」…そこにこそ真の人生の基盤がある。そこにこそ、「空の空ではない人生」が生れるのである。冒頭で紹介した藤村操の「人生、曰く、不可解」という呻き、太宰治の「僕は自分がなぜ生きていなければならないのか、それが全然わからないのです」という嘆き、そしてジードの「私は存在理由を見つけないのだ。なぜ私が生きているのかを知りたいのだ」という叫び…こうした人生の意味を尋ね求める問いに対する答がここにある。「主に信頼し、主をおそれよ」…それが答である。

そのことを伝道者・コーヘレスは本書の結論部分でこう言い表す；「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」(12:13)。神をおそれて生きる、それこそが、「空の空」を打破する道である。この最も根本的なことを否定するから「空の空、すべては空である」と言わざるを得ないような空しい人生を送ることになるのである。

聖書はこう告げる；「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」…『伝道者の書』12章13節◇